
弓の軌跡、孤独な狗

平久左衛門

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「」の軌跡、孤独な狗

【Zコード】

Z28400

【作者名】

平久左衛門

【あらすじ】

常に孤独なモノは、孤独であることを知らなかつた。

他者の幸福を願うモノは、己の幸福を願えなかつた。

張り詰めた「」、その矢が放たれれば只突き進むのみ。残滓も残さず、手応えを知るのは「」のみ。

だが、その傍に居る者には見える。確かな軌跡を

最早戻れない青年の後ろ姿を見ながら、孤独故に孤独を知らなかつ

た少年は、何時しか追いかけるように走っていた

弓兵と狗、二人が出逢い物語は綴られて行く。

アーティストによるアート（前書き）

有り体に云つて、よくあるf a t e ×ネギまのクロスモノ。
一年くらい前に書いて放置していたものを掘り起こしました。

書いてて「いやダメだ」と思い封印してましたが、なんか急に勿
体無くなつたので放出。

あんまり長い話にはなりません。

あ、あとBじゃないんでそっち期待しないでください。

犬上小太郎は、狗族と人の間に産まれた。

それは決して生誕を祝福されていない、望まざる生。

人とも違い、狗族からも忌み嫌われ
気が付けば常に独り。それが寂しいかと問われれば『それが普通』
と答える。そもそも、他者との触れ合いが無かつたモノに、『寂し
さ』を理解させるのは困難ではある。

だから『普通』。それ以上でもそれ以下でもない。

独りで生きて行くには、力が必要だった。己を庇護してくれる存
在が無い以上、力が必要であり、少なくとも小太郎には絶対的な信
望が『力』にあつた。

強くなることを生きる道標とするまでに、幼い自分は力以外に信
望するモノを持たなかつた。

それは7つ歳を数えた日　いや、本当に生まれから7つ正確に
数えたかも解らない。何せ　俺　を産んだ親すら今何処に居るかわ
からない。

そんな　俺　が自分の生誕を正しく覚えているとは言い難い。
だが、そんなこともどうでもよくなつた。何の事はない。己の力
及ばず、ここで果てるからだ。

『なんや、むっちゃ悔しいわ』

この期に及んでもまだ、力が足りなかつたことを悔やむ　俺　。
深い森、月明かりの薄い光に照らされた　異形　。形容するなら
鬼　。

数は5、小太郎からしたら見上げるどころか、少し離れないと顔
すら見れない身長差。

「坊主、お前えさんもなかなかやるようだが、儂らにや及ばんか
つたなあ」

一匹の鬼が、喜色に染まつた顔でそんな贅辞を贈る。

『ぬかせ……』

贅辞に軽口で返そうにも、心で紡いだ言葉は口を出なかつた。そんな力もない。狗族としての獣化能力を出し切つたが、それでもいよいよにやられた。

『あー、俺死ぬんかな』

このまま眠気に呑まれて、それこそ眠るように死ぬのも

『ふざけんなや！ そんなんあつさり死ねるか！』

そう自分を奮い発たせ、鬼を睨んだ時……風を切る様な鋭い音と、鈍い刺突音が聞こえ

「『なつ！？』」

辺りの4匹の鬼と、俺の驚愕の声を残し、目の前に居た鬼が消えた。

その数瞬後に、先程消えた鬼が居た場所に新たな人影が降り立つ。

『人影……やて！？』

そう、それは『人』にしか見えない。こちらに 赤い背を向けた人影。長身で白髪。その背は一振りの剣を想わせた。

「ふむ。たつた一人の子供相手に、随分と大人気無いものだな」赤い人影が声を発する。背中しか見えなかつたが、男だとそれで確信した。

「せやかで、儂らも仕事違うたらこんなんせんわい。

『やれ』言われたら『やる』しかねえんや。それが喚ばれた儂らの勤めや』

言うなり右側に居た鬼が赤い男に襲い掛かる。横薙に払われた野太刀は、硬く高い金属がぶつかり合う打吶音と共に途中で止まる。

「けつたいな術やの。にいちゃん、どつから出した？」

右手に握られた亀甲紋の黒い中華刀。

『なんや！？ サつきまで何も持つてへんかつたんに』良くなると左手にも白い 黒い中華刀に似た 剣が握られて

いた。

左手の剣で野太刀を振るつた鬼を『還す』と、振り向き様に正面の2匹と左の1匹に向かつて剣を投げる。

それを隙と見た左の鬼が錫杖のようなモノで襲い掛かかり

「なつ！？」

先程の焼き回しの様に 全く同じ双剣で 攻撃を防がれる。
違つたのはその後

「あがあつ！？」

唐突に『還る』。消えた鬼の 背中が在つた 場所に投げた剣。

すると正面左寄りの鬼も同様に還り

再び双剣を残つた一匹の両脇に向かつて投げた。

最初に投げた一組を手に取ると、そのまま残る一匹へ走る。

「なんなんや！？ 何本持つてん ！？」

交差する二刀を鉄棒で受け止め、疑問を投げ掛けるが……言いかけながら背面から同じように交差する二刀によつて『還つた』。

『 って、一撃で鬼を還す刀つてどんなんやねん！

しかも、何時の間にか消えとるし！』

疲労と負傷で気が付かなかつたが、手放した剣が刺さるだけで鬼を還すなら、それはどれだけの魔力を持つのか。

氣や魔力で強化するなら 小太郎が知りうる限りだが 手元になければ、少なくとも投げて戻るまでの時間は強化出来ず、ましてや効率が悪すぎる。

となれば、剣自体が魔力を内包している可能性。唐突な現れ、唐突に消えたからアーティファクトの可能性が高い。

「立てるか？』

思考している間に男は膝をつき、手を差し延べる。

これが孤独な一人の出会いだった

（後書き）アマゾンの本（アマゾン）

短いね、ホント。

それに説明無しですね。組み合わせ的に。

兄、弟

「小太郎、ここにその魔法使いが居るのかね？」

3日前にぶつ倒れた俺を介抱して、野宿しながら俺とこの兄ちゃんはお互いの事を話し合つた。

なんでもこの兄ちゃん、宝石の忘れてもた。まあ、よー分からんけど、兄ちゃんも分からんらしいからええか。名前は衛富士郎やつたか。日本人みたいな名前の癖に日本人に見えへんわ。

そういうや、野宿なんにただの焼き魚が美味かつたわ。変な葉っぱとか変な茎みたいなんと、一緒に焼いたりすり潰して乗つけたり。で、俺らが居るのは 仕事の依頼 しとつた西洋魔法使いが居る変なん家や。

「……どうでも良いが、『変な』が無駄に多いぞ、小太郎」しゃーないやん。変なんを『変な』ってゆーて、何が変なんか。それに俺、兄ちゃんみたいな大人ちやうねん。お難しく言葉知らんわ！

それよか早よ行くで。

「ちつ……

お帰り、生きてたのかい「

なんや！『ちつ』ってなんや！

絶対コイツ俺こと見捨てたわ！

「抑える、小太郎。このような道理も知らん陰湿な腐れ外道に敵意を向けたところで器が知れるだけだ。

ところで陰険腐れ外道よ、貴様が依頼した件は小太郎が達成した様だが、報酬はないのかね？」

依頼言つんは、何やらヘンテコな短い剣を変なん所から盗むから追っ手の足止めしろ やど。

「達成？ 達成だと！」

「コイツがちゃんと足止めしないから、僕は大切な剣を
そこまで言つて言葉が止まる。ビックリした顔しどんなー。俺も
一緒にやけどな。」

「な、何故お前がコイツを持つてるんだ！」

「ふむ、やはりこの短刀がそつか。いや、何。途中で拾つたまで
れ」

白々しいな兄ちゃん。しかも妙にムカツク笑い方すんな、兄ちゃん。
俺に向いてないだけマシやけどな。

「さて、これがある以上、依頼は達成された訳だが 貴様、小

太郎は最初から捨て石だな？」

そんなん俺かて最初から分かつとる。だから力で依頼達成すりや
ええんや。そうすりや文句なしや！

「小太郎……それは違うぞ。この陰険腐れ外道はな、『お前が死
ぬことを前提に』依頼している。

死人に口無し、自身に足は付かず、報酬も払う必要性がない。仮
に生き延びても 剣を落とした以上、依頼は達成されない……と
ね」

なんやそれ！ ……ん？ ちょい待ち！

「その僕の 落としモノ をなんでお前が持つてるんだ！」

せや、この『いんげんなんぢやら』が落としたつて、『隠した』

んゆーことやろ！

「たわけ、陰険腐れ外道。あのような結界なんぞお粗末過ぎて溜
息も出ん。

貴様は一流にも劣る三流だな。陰険腐れ外道 ワカメ』

いんげん……ワカメ？ あーウカメやワカメ！ あの頭なんやえ
らく何か似とる思たんや。

「ワカメって言つな！ 断じて！ 僕は！ ワカメじゃない！！」

「さて、貴様は依頼料を払うのかね？ 払わん、と言うなら何、

貴様のことを洗いざらい立法機関に話し、これは持ち主に返した上

でその報復活動を援助するだけだが。

ああ、安心したまえ、五体満足とは言わんが死にはしないようこしてやる。罪状も増えるかも知れんが、死刑だけは回避するよう調整して やる

お、ワカメおもういわ。青い顔しどると、まんまワカメやなー。

「士郎の兄ちゃんやるなー。俺だけやつたら金ふんだくれんかつたわ。」

ワカメの所から報酬を 気持ち多め に貰もらてきた。これで美味しいメシたらふく食えるわ。

「ふむ。仕事の後の食事は人生の潤いだ。だが、我々にはまだ一仕事残つていいのだがね」

なんやねん、仕事で。

懐に手を入れた思たらなんか取り出す……って、なんでそれ持つてんねん！

さつきワカメに渡したはずの短刀がある。

「ああ、あれか？ あれはな、私が造つた贋作……偽物だよ」

『壊れた幻想』

なんか咳いた瞬間、ワカメの居る方から悲鳴が聞こえた。なんや

? 何したんや！？

「何、もう用済みなので消した……いや、自壊させた のぞ。

剣に内包された魔力を撒き散らしながら、な

ほへえー、ほんまおもういな、兄ちゃん。

しつかし、めっちゃ腹減つたで兄ちゃん。早メシ行こうな。

「……話を聞いていたのかね？」言つたはずだ、一仕事残つていると。

祝杯は任務完遂を以つて、だ

任務なんて難しい言葉は無しや！

男なら 完全勝利 ！ これやで！

「クッ……違ひない。ああ、そうだな。行こうか、小太郎。俺達の完全勝利に」

まだ幼い少年は、赤い青年と邂逅する。本来なら有り得ない奇跡は、もう一つの可能性への軌跡を

兄、弟（後書き）

先生一、短いし潤い（おんなのこ）成分が欠片もありませんー。

ハイ、お粗末様でした。

出す時期も違えば、おんなのこ需要も無いですね。

そんな塵紙にも劣るモノを掘り起こした理由は……特にありません。やはり敢えて言つなら「勿体無いから」でしちゃうね。

当時（一年前）はこの手のクロスモノって、だいたいが癒し（おんなのこ）に満ち溢れてたのに、そんな中流れに逆らつて書いてた私は一体……

まあ、今後もおんなのこ（萌え）が絡むことは無いので、皆様を失望させ続けますよー

弓、狗

小太郎と云う少年はその特殊な生まれから、普通の少年たちのような生活は出来なかつた。

だが、それでも不幸だとは少しも感じていない。そして、捻くれてもいなかつた。

庇護も保護もされていない。だからと言って放置もされてはいけない。

衛宮士郎と名乗る保護者のような存在は居たが、環境から自立心が非常に強い小太郎故に、必要以上の庇護はしなかつた。

だが、至らぬ幼い子供が道を逸れぬように、決して曲がらぬように鍛えた。それは教育者と呼ぶのが相応しい。

憐れみを持たず、生まれの歪しさを否定せず、忌避することもない。自然体で小太郎に接する大人は士郎が初めてだった。

だから人とも化生とも違う自己を認識しながら、折れず曲がらず10を数えるまでの3年間を生きて来れた。

実は小太郎と士郎は『裏』ではそれなりに有名になりつつあつた。幼いながらに卓越した戦闘力を持つ小太郎と、『謎』の赤い弓兵

仕事名『アーチャー』のコンビは日本ではそこそこに名が知られてきたのだ。

士郎は仕事名と真名をはつきり分けたが、小太郎は分けるつもりは無かつた。士郎は『過去』の苦い経験から、己の情報を極力曝さない為に。小太郎は己を誇示することに危機感が無い故に。

そんな小太郎に士郎は眉を寄せたが、『小太郎の親類が見付かるかも知れない』

などと、何処か今だに人を信じる甘さが抜けない思考をしていた。

『弓狗兄弟』等と呼ばれているが、兩人共他人の評価を気にしない性格から、一人で依頼を受けた場合は専らこの呼称だ。

そして、春先に小太郎が依頼を受けてきた。放任主義ではないが、

依頼を受けるも撥ねるも小太郎の自由にさせている。フォローするのもサポートするのも自身の役目であり、妥協はしない辺り寧ろ親馬鹿に近しいモノがある。

そんな土郎だが、今回は依頼自体に難色を示す。

「小太郎……お前、ちゃんと依頼見たのか？」

「おう！ ちゃんと見たで、西洋者と戦り合つんやろ？」

その答えに、頭部を襲う幻痛を覚える。

確かに、依頼の一点は『西洋魔法使い共に復讐する為に力を貸して欲しい』となるが、内容はそんな単純なモノでも無い。

関東魔法協会の理事長の孫娘を拉致、生贊にして太古の鬼神を復活。それが内容であり、依頼の通り『復讐する為に力を貸す』事になる。

決して『西洋者と戦り合つ』ことが内容ではない。

生まれやは是迄の環境から『力』に対し偏執を持っているのは理解している。そして、それ故に力を誇示し、ぶつけ合つ事にある種の喜びを見出だす 端的に言えばバトルジャンキーであった。

今回の依頼も『復讐』戦うと直結し、細かい内容など見ていいに違いない。普段なら、弱者に態々手を擧げるような真似はせず、人さらいの類いは請けない。戦闘者としてのプライドと、生まれの境遇から覚悟もない者や女子供 意味合い的には一緒だが には手を出さない。

『くつ……暗に戦闘を匂わす依頼をしてからに……

憾むぞ、依頼主』

そして、事が済んだら小太郎に 教育的指導 を施すことを心に決めた。

麻帆良学園都市

日本は関東にある、魔法使い達の拠点『関東魔法協会』であり、有数の巨大な 正に『学園都市』と呼ぶに相応しい場所。

その一角に女子中等部があり、学園長室と書かれたプレートの部屋に幾人か居た。

時は陽を隠し、帳を落とした闇の中。

陽に隠れていた『在る筈が無い』とされている存在もまた、闇の色に紛れて行動を開始するものだ。

それらは一様に『魔』を冠する存在。偽りの生を持つもの、人を喰う闇の眷族達　そして、人の身ながら『魔』を用いる術を見出だした者達……

則ち、『魔法使い』と呼ばれる者達もまた、その闇色に染まる時間を見フィールドにしていた。

そんな闇が外を占めているなか、この学園長室に居る4人は全て、『魔』を知り、『魔』を冠する者達だった。

一人は老人で、一人は青年。残り二人は女性。

好々爺とした異常に後頭部が突き出した老人は学園長と呼ばれ、この学園都市の長にして、『関東魔法協会』の理事長だった。その学園長が言葉を発する。

「嬪殿から連絡があつての。何やら関西では水面下で不穏な動きがあるらしい。

そして、タカミチ君。君は聞いたことがあるかも知れんが……『弓狗』もまた関西じや」

タカミチと呼ばれた眼鏡の青年は、『弓狗』の言葉に苦い顔をした。脇に控える褐色の肌をした、長い黒髪の少女は顔に出さなかったが、僅かながら反応がある。

肩くらいの黒髪を、左頭部に一房に纏めた小柄な女性　容姿も年齢的にも少女　は、他の者と違い関西に最も縁を持つが、その名を知らない。故に問う。

「学園長、その『弓狗』とは？」

「うむ。ここ2~3年『裏』で名前が知られてきた二人組でな、『弓狗兄弟』と呼ばれたりしとる。

片方は10かそこらの少年での。年齢に見合わぬ卓越した近接戦

闘技術を持つそうじや。

そして、もう一人なんじやが……」

学園長は「うーむ」などと唸りながら、続きを口にしない。

やつとの思いで口にしたのは

「……いや、のう。さつぱり分からぬでな」

そんな言葉だ。

小柄な少女 刹那 は思いきって聞いてみた。

「分からぬ……とは？」

おかしいのだ。有名になりつつあり、高畠先生や龍宮 褐色の女性 は名前を知っているようだった。

なら、少なからず情報があるはず。

「うん。確かに情報はあるんだ。

……だけど、彼 ああ、男らしいんだけど。その彼が戦う姿を、もつと言えば『戦闘方法』に関する情報が極端に少ないんだ』見兼ねたのか、高畠先生が代わりに説明する。続けて龍宮が「なんでも私のような褐色の肌で、髪は白、長身で赤い外套を羽織った男らしい」と、その外見特徴を付け足す。

「なんでも、弓を使うらしくてね。仕事名も『アーチャー』なんて名前なんだ。

……確かに、負傷したり……その、『殺された』人には『矢らしきモノが刺さつた形跡がある』って言つのだ」

濁すように『殺された』と言つが……そうか、人を殺したりもしてるのか。しかし、違和感がある。確かに負傷や殺害に使われた凶器は納得した。だが、弓矢とはまた古風だし、剣や槍などの近代からみたら同じ様な古い武器に比べて、大分隠密性はあるがそれでも目標が見える位置から射る以上、全く情報が無いのはおかしい。

それに変だ。『刺さつた形跡がある』……と言つことは、『

凶器の痕しか無い』と言つことではないか？

凶器を回収に来た？

凶器が霧散した？

「うん。刹那君が思つてゐる通りだ。『兵を名乗り、実際に矢が当たつた形跡があつての話しからね。

ただ、『その様な痕があつた』と言つ謎しか残らない。回収したなら何時？ 霧散したならどうやつて？

それがはつきりしない。

傷痕からも細い剣を刺したような感じもないし、傷口の形状とかを解剖しても矢らしきもので間違いないらしいよ。少なくとも『細い鎌の付いた棒状の物』って言つから僕は矢で合つてると思つんだ』

現代の捜査能力での結論なら、それに異論は無い。だが、やはり変だ。矢でないにしろ、少なからず『戦闘方法が不明』と言われる以上、姿を消して何かを刺すか、遠距離での狙撃か。

姿を消してと言つても、魔法使いが公にはされてないが居る以上、完全に隠密状態で接近するには無理がある。『有名になるくらい依頼を熟した』ならそれなりに何か探られてるはずだ。やられた瞬間全方位広域に『何か』する等の対策を練られたり。

だが、そういう話しが無いなら『遠距離での狙撃』か？ それでも変だろ？ 銃などの火器と弓なら、銃の方が射程が長い。魔法と弓なら隠密性は弓だが、やはり射程は魔法になるだろう。

しかし、射程だけで見たら弓では有り得ず、だが捜査では矢らしき傷痕と結果が出る。

なら弓なのだろうが……弓で人に発見されずに『殺傷力が高い』威力が放てる距離から撃つ……

それはどんな魔法か。いや、魔法であつても銃の狙撃力に勝てない。銃の射程を最大に活かすなら場所が限られる筈だ。

「やつぱり、今までに狙われた人達は『銃での遠距離狙撃』を警戒したりしてたらしくてね。当然狙撃されそうな場所に人や機械を配置したり、狙撃場所を狭めるように考えてたみたいでね。距離は

人数的にも厳しいだらうけど、常識的には2kmもあれば十分だと考えての配置。

でも、配置した人は何も無かつたって言うし、本当に謎さ。さらにはね、魔法使いとかは障壁があるだらう？ そういうつた魔法使い達は更に酷い事になつてたんだ……。

大砲でも直撃したかのように体が捩れたり…… 障壁が在る分、力技で「障壁」とやられてたんだ」

それは

感情をあまり表に出さない龍宮ですら顔をしかめる。強固な障壁を貫通し、その結果が大砲の如き跡……

やはり濁してはいるが、一撃必殺 だつたのだろう。

「ここでアーティファクトの謎が残る。複数のアーティファクトの所持だとしても、本国での登録標に謎の手掛かりになりそうなアーティファクトの種別は無かつた。

威力、射程に一貫性が無いし。可能性として一番高いのは、実は全部偽ラフで、本当は弓兵でもなく、完璧なステルス状態での暗殺……かな？

それも、障壁ごと となると至近距離なら流石に何か判るものなんだけどね」

ああ、理解した。『わからない』と理解出来た。そんなのは魔法であれ何であれ、聞いたことも見たこともないし、伝承にも記されていないだろう。

理の外に在るモノと解する。些か言葉として間違っているが、つまりそうすることでその人物が存在する、と無理矢理に納得しなければ為らないと。

「と言つわけじや。アーチャーはその得体の知れ無さ故に、一部では忌み名。

だが、幸いにしてアーチャーに狙われた輩は皆、悪事を働くものばかりでの。忌み名として呼んだるのはそういう輩のみじや」
だからと言って安心するべきではない。

寧ろ、得体が知れ無い以上、敵に回ればこれ恐怖感は較べよつもない。どうにかこちらに引き入れるか

「妨害か消去…か。引き入れるのが一番だらうけど、『巨狗は関西に居る』って話しだろ？ そのへんどうなんだい？」

黙していた龍宮の問い。関西か……

「それじゃよ。少なくとも能力者じやろうから、『魔法使いの関係者』の可能性は高い。問題は日本で、しかも関西でしか名前を聞かんでの。下手をすれば」

「 藪蛇を突きかねない、か。厄介な……」

日本固有の魔法いとも言える『呪術士』は西洋魔法を嫌う者が多い。『大戦』と呼ばれた戦の傷痕からこういった軋轢は生まれたのだ。現に、この話しの発端も『関西水面下での不穏な動き』から来る。

もし、その動きに同調せずとも、似た思想だつた場合

「危険だな。なんとかならないのかい？」

「うむ。明日からの 修学旅行 が京都じやからの。一応『西の長からの依頼』として婿殿にアーチャーへ依頼して貰つた。結果はまだじやが」

「 そんな時、機械的な呼び鈴が鳴り響く

『、狗（後書き）

…一人もおんなのこが出でますね

でもね、たぶん出番はもう幽かにしか無いよ。残念。

もっと残念なのはダンディYYYY。我々のタカミチ先生ですよ。出番が……

実はその手のスジには堪らない、ダンディグラスなオヤジ共が多いネギま。個人的には活躍させたいけど、まことに残念。詠春が居るからいいか。原作じゃ良いヤムチャつぶりしてたし。ちよつとくらい出番多くてもいいっしょ？

士郎は小太郎が依頼に自分が乗らないことを伝えた。元々、全ての依頼を一人で熟している訳ではない。

難度の高い、又は効率の観点からコンビを組むだけだ。小太郎も自らの腕を確かめる意味もある為、逆に「来んでもええわ」などと言う。

そして、士郎は自らに宛てられた依頼に目を通す。関西呪術協会の長、近衛詠春からの依頼。

『ふむ。刀剣鑑定……とはな』

士郎自身に直接来る依頼は刀剣鑑定が主だ。真贋を見極め、刀剣の逸話すら瞬時に見極めることができない『解析魔術』のイカサマで、正確な鑑定は一部有名だった。

ただし、その出生すら謎の士郎が呼ばれるのは、あまり表に顔を曝したくない 云うなれば 真っ当ではない人種が大半だ。

それが日本でも有数な大組織の長から依頼が来た。しかも、『退魔』や『魔法』などの一般には決して曝せない類の 裏側 から。だが、他の組織や個人とは違い、裏側 ではあるが、俗に云つヤクザ・暴力団・マフィア等とは対極にいる。裏での立法機関に近い存在だ。

そして厄介な事に、士郎には戸籍などの身分証明に必要な情報がない。何せ この世界の住人ですらない のだから……

つまり、関西呪術協会は士郎にとつては遭遇したくない組織と言えた。

『予想以上に早いな……いや、3年ももてば十分か』

相手から接触を図ってきた。それが裏であれ『正規の手順』であることからそう悪い話でもなさそうだ。
断言は出来ないが、拘束してどうこうすることはないのかもしれない。

それに今回の小太郎の依頼は少しばかりが、多大に大組織の天秤を傾け兼ねない内容だが、それ以前の依頼は組織が出張るほどの害あるモノは無かつた。

アウトローにありながら、その実割と『マトモ』な実績しかない。だからこそ、大組織の接触が予測より早いと感じたが、乱暴な接触でなければ対話の余地はある。なによりこちらからそれを拗らせる意味は全く無い。

幸い、今回の接触は『弓兵』宛てであり、既に小太郎は出払っている為、直接小太郎に危害が及ぶ可能性は低い。

『興に乗るのも一興か』

日本の住宅事情を無視したような、その広い和座敷に幾人かの人
が居た。

衛宮士郎もその一人。正座にて対面するのはこの座敷のある、家
屋　その所有権を持つ大組織『関西呪術協会』の長だった。

他の者はその佇まいや雰囲気、得物らしき有無により術者と剣士
が半々の計6名。だが、この部屋外に人の気配も無い為、退出は自
由　と解釈も出来る。

拘束はなさそうだ。油断は出来ないが。

「お初にお目にかかります。私は近衛詠春　　関西呪術協会の
長を勤めさせて戴いてる者です」

物腰の軟らかさと、雰囲気。瘦躯ではあるが、清涼な佇まいと引
き締まつたその身体から剣を振るう者だと判断。

周りの者がややピリピリした空気を纏う中、対話の姿勢と涼風の
ように静かな空気は立場さえなれば好感が持てる。

「長自らとは光榮だ。

私はアーチャー。知つてているとは思つがね」
長に対し、憮然とした態度に　　当の本人より、周りの数人の眉
尻が上がる。

軽い挑発じみた物言いだが、さすがにこの程度で騒ぐ部下ではないらしい。無視はしないが、過剰な反応も無い為、これ以上の挑発的行為は裏目になる。少し態度を軟化させよう。

「有名ですよ。

僅か数年で、日本のみとは言え『』『』『』と二つ名で呼ばれるまでには。

特に貴方は、ね

持つて回った言い回しだが

つまりはこうだ、『謎が多い』と。

出生や戦闘方は特に、と。

そして、それを切り口に話を進める以上、依頼とは刀剣鑑定ではない。つまり

「 私に戦場に立て、と？」

「 いいえ、違います。

貴方にはある依頼を『受領しない』と言つ制限を請けて戴いたいのです」

思わず、眉尻が上がりてしまう。それと同時に思い至るのは小太郎の依頼だ。

「……もしや、それは関東の娘子を拉致する、と言つ話か？」

この言葉に流石に表情と空気が動く長。つまりは肯定、か。

「もしや、既にその依頼を？」

「いいや。『私は』その依頼は請けてはいない」

余程の懸念だったのだろう。今までとは違った射抜くような視線と、その声音。

そこへ即答で否定が来れば、誰もが訝し気に思うだらう。態勢を忘れてこちらを凝視する。

「……そうですか。

それと、一つ訂正を。『関東の娘子』と言いましたが、その娘とは私の娘でもあるのです」

つまりは『関西呪術協会の長の娘』『関東魔法協会の孫娘』と言

う窮めて危険窮まりないポジション。

『……天秤のバランスどころか、そのものを壊しかねんぞ、小太郎よ』

両組織の長の直系を拉致とは　このところ多い幻痛も、もはやここまで来ると頭を抱え込む程の激痛だ。

その様子に近衛詠春も事情を察したのだろう、気遣いながらも敢えてそれを聞く。

「……それで、依頼の方は

「　請けざるを得ないだらうよ。私の弟が既に依頼を請け、赴いてはいるが

小太郎は単に戦闘がしたいだけだろうし、女子供に好んで手を擧げる悪癖は無い。あくまで「拉致の邪魔をする者の相手」に留まるだろうから、ある意味安全ではある。

「……これは提案なのだが

近衛詠春は、あまりの展開に思考が止まってしまう。

目の前の男、弓兵を名乗る生糸の戦闘者からの提案故、だ。

損得で言えば間違いくく“得”。

それも展開から言えば最良とも言える。

弓狗の内、狗は問題の一派が既に契約している為、最悪、行動制限を付けられれば御の字　　だつた。

それを頸に強行派に枷を掛ければ良かつた。

強行派でもかなりの小数　　それこそ主犯は一人か一人と予測される程の人数。全く足が摑めない。

主犯は逆に言えばある意味特定は楽かも知れないが、あまりの人数の少なさから行動が読めない。

規模からみればただの嫌がらせに近い。

だが、思わず情報に内心驚きながらも少なからず『目標』はわかつた。

『まさか娘の誘拐とは』

おそらく、アーチャーはこちらがそれを知っていると思い、気軽にいや、もしかしたら東西のバランスが崩れるのを未然に防ぐ為にバラした可能性もある。

どちらかは知らないが、目標が解れば対応は取れる。

『修学旅行』が目前故に、それを中止には出来ない。そもそも直前まで行動が知れなかつたのだから致し方ない。

しかも、タイミング悪く今京都は主立つた術者・神鳴流剣士が払つており、強行派の助力が期待出来ないならば、総力からみて半減どころか更にその半分。

最悪、主要拠点の護りだけで、人員の派遣は不可能。関東も多岐に渡る修学旅行先に人員が割かれ、必要分しか派遣出来ない。旧知で信頼の置ける者だとタカミチとエヴァだが、タカミチは立場的に自由は効かない。エヴァはそもそも学園から出れない。

時間でもあれば、事が事だけに強行派も動かせただろうし、他の助力も得られただろうが……

限りなく悪い状況にあってその提案は渡に船。弓狗が兄弟かそれに準ずる間柄なら期待出来ない提案だった。

「何を驚く？ 主犯が何を考えているか不明だが、東西のバランス処か計りそのものを壊しかねない状況で、私が“あの馬鹿”に手を貸すなど有り得ん。

馬鹿には丁度良い薬だ、後で独房にでも容れて教育でもせねばな」
提案とは『狗が請け負つた依頼の達成妨害』だ。

思わぬ助力に思考が止まるのも致し方ない。正直、こちらからの提案を出しても受け入れられるかすら不明なのに、それより考え難い向こうからの提案。

「報酬は そうだな、事が解決した際に於ける我が弟への温情

…… “ある程度の“身柄の保証でいい”
報酬もまた破格……いや、それは雇われている事が端から分かつているからそう思うだけか。

何も解らぬ状態では、立場は主犯と変わらぬのだから。

「それでよろしければ」

「いやなに、私もおそらく表立つて行動出来んからな。

それと、何か書簡でも受け取るのかね？」

書簡？　密書か。なるほど、敵の目標は一つか。

敵も分散化は避けられないだろうが、こちらはどうちが本命か解らない以上、既に後手に回るのは確定している。

それと「表立つて行動出来ない」とは？

「先ず、敵は私達二人ではなく、片方だけを雇つたワケだが……おそらく、ただの目眩ましか樁程度の認識だろう。

依頼事態がどちら宛てでも無かつた。つまり、“名前”と“最低限の能力”しか期待していない。

こちら、もしくはあちらが分散した場合、小太郎が居ない方が本命の可能性は高い」

可能性に過ぎないだろうが　とは言つが、この状況で指針が出来るのは有り難い。

「それと、貴方の娘を先に保護は

「　それも考えましたが、娘は“こちら側”を知りません」

その答えに、むつ、と唸り考え込む丘。

考へていることは分かるが……

「貴方方親子の問題ではあるが……、いや、それならば尚更だ。もし、“こちら側”が知れた場合は？」

「……その時は、娘にも事情をお話します」

「そうか。ならば、私も留意しよう。

今回、貴方々のテリトリーで“こちら側”的事件が起きようとしている。ならば、未然に防ぐ手段ではない方が後の為になるのではないかね？」

それは

つまり、

“娘”を“最後の贊”にしろ　と？」

煮え返る程の怒りを覚え、それを隠すでもなく目の前の弓兵に向ける。

感情も無い秤にかけた考え方なら　　ああ、それはあまりに効率的だ。

娘を餌に、調停書に血の印をしる。穿った話だが　確かに“効率的”だ。

大組織の存在維持に一人を贅にするやり方は、昔から在る政治手法ではある。

今回なら強行派の膾を取り除き、『既存の価値観の崩壊』を逆手に……それを威しに使う、と。極端ではあるが、そういう事。一大組織の長の血縁が危険なのだから、それを助長した者は責任を取れ。そう言われば、不満があれど従うか　反るか。

反った場合は、多少の被害はあるだろうが、大義名分がある分、更には両組織の結託が確約されているのだ、完全な撲滅が可能だろう。

だが、それは

「　頷く事は出来ませんね」

黙する両名に、政治向きではない侍従達の困惑。

ただ真っ直ぐな剣士達は、長の拒絕に安堵し、娘を餌にしろと言ふ弓兵に険しい視線を注ぎ続ける。

そんな混沌とした場にて、吹き出すような短い笑いを以て沈黙を破つたのは、そもそも原因であつた弓兵だった。

「ふつ……、やはり、だな」

「……何か、ご不満でも？」

張本人が“その態度”でいて、問われ、一人納得されては溜飲が下らないのが人だろう。

詠春の「不満でもあるのか」と言つ問いは　　その実、詠春自身が不満だと言う証だ。

散々人をおちよくる様な態度を繰り返す弓兵に、長よりも先に周りの者達が切つ先を向けかねない。暗に「それを抑えるのが君だろ

「う」と田と、皮肉気な口の歪みが訴えている。

ここで臣下を抑え切れねば、おそらく「今回の事件も、起きて当然だ」と、近しいものすら抑えられぬのだから、その外れは君の領分ではない、と。

そうなれば、彼は娘を贅にしかねない。だが、彼は「やはり」と言った。

既に、彼の中に解答があり、「こちらの思惑を看破した上で問い合わせるなら

「私に何を望んでいるのですか?」

「いや、なに。望みと言つ話ではないが……」

どのみち、今回は後手に回るのは致し方ない。私とて、直ぐさま君達と連携は採れないのだ。好きにやらせてもらえれば不満はないぞ。

それに「

遅かれ早かれ、娘に真実を告げる覚悟をしておけ
覚悟、とは。

確かに、もはや事は動き始めてしまっている。

弓兵の言つ通り、後手に回る以上、娘の視野がこちら側に入る可能性は高い。寧ろ、何も知らずに解決することこそ幸運がどれだけ続けば良いか……

そして、それを前提に弓兵は事を進めるのだ。ある程度の危険すら度外視して、“目標”を燐り出すに違いない。

弓、狗 2（後書き）

前話に繋げても良かつたけど、場面が急に変わるから切りました。
そして、ストックはこれで終わり。

次はいつ掲載か全く不明。

そして、潤い（おんなのこ）成分が補充されるのも不明。

青年～中年組は安定軌道に乗つたけど、少年少女は安定性に欠けますね。出番的に。

小太郎、頑張れよ。君が今、一番香ばしい（おんなのこ）香りに近い。

そうだ、小太郎……俺達の戦いは、まだまだこれからだぜつ！
先生の次回作にご期待（ry

ヒトは 求める

置いたままの受話器に手を添え、暫し睨むよりかの手を見詰める男が居る。

近衛詠春。男の名だ。

何か考え込んでいるのか、睨み続けること数秒。そして、今度は目を瞑り、顔を上げ数秒。

ゆつくりと、ゆつくりと、ゆつくりと

小さく隙間を作った唇から吐息。顔を下げながら吐き続ける。やがて吐き終え、目を見開き、空いた手でボタンを押し始めた。短縮を使っている為か、ほんの数回の入力で呼び出し音がなり始める。

ある種の儀式的な雰囲気すら感じる、その段階を踏んだ行動。そこに意味が在るとして それは何なのか。

『ヒト、と云うのは、徒に意味を求めがちですね』

僅か数コール。そんな事を考えながら、相手を待っていた。

学園長室に鳴り響いた電話の呼び出し音。それを数回で止めたのは、やはり部屋の名を冠する者だった。

慌てず、確りと持つた受話器を耳に充て、その嗄れた声を吐く。

「儂じや

酷く端的で、ある意味横暴。この場に掛けた以上、電話に出る者は誰だか知つていよう、と。そんな独り善がりにも聞こえる台詞だが、彼はそれだけの地位もある。

その短い切り出しに不満も無いのか、会話のやり取りはスムーズらしかつた。

ふむ。 そうか。 ほうほう。

そんな領き声を発しながら相づちを数回。そこで瞳を隠さんとば

りに蓄えた眉が、片方上がる。

「ほ……なんと、それは重畠。

……して、信用は出来るかの？」

その会話を意図せず聴いてきた者達も、そこで学園長の雰囲気が変わったのを感じた。

「……そうか、いや、良い良い。

媚殿が気に病むこともあるまい。

取り敢えずの指針が得られただけでも御の字。苦労を掛けてすまんの」

硬い雰囲気から、相手を気遣うような流れへ。

幸の中に不幸、不幸の中に幸があつたような。平を知らず、波打ち際のように訪つては返すような。丸く納めたいのに、方を叩けば、対が出るような。

結果を見れば、可もなく不可も無いのに、その過程は歪。そんな会話があつたのだろう。

「……では、の。そちらは任せたぞい」

そう、言葉で締めて受話器を置く。

背もたれに深く背を預けると、若干上を向いた顔に疲れを乗せて、溜め息を溢す。

どうやら、話は平坦に終わらなかつたらしく。どちらかと謂えば考えるまでもなく、その表情が物語つていた。

暫しの沈黙。それを破るのは一人の少女だった。

「あの……それで、先程の電話は」

少女 刃那 は、今の会話が誰と何の話か半ば承知で、問い合わせつより確認を込めて尋ねた。

「刹那君の想像通り、媚殿からじや」

ゆっくり体を起こすと、両肘を机に着き、組んだ手の甲に顎を乗せて応える。

「どうやら『狗の内』を引き抜くことに成功したよ」

その言葉に学園長以外が驚きを表す。

それもやうだらう。先程までその『』について難儀していたのだから。

これは正に吉報。問題の中で頭を悩ませていた者が、中立を越えて此方側に転がつて來た。

だが、それでは先程の学園長が溜め息を吐いた理由も、疲れた表情も説明がつかない。

そこには何か、吉報に対する負の要因が在る筈だった。
そこで何かに思い当たつたのか、龍宮が問う。

「先程『弓』は『』と言つたね？」と言つことは、狗は

「 そうじや、察しの通り。正に渦中じや。

動きのある一派に雇われておる

それは、つまり。

「……確実に妨害が来る、と言つことが確定したわけか」
それは、確かに吉を打ち消す話か。

だが、それでは計りは中で止まる。傾きが無い。なら、さらに何かの重石が在る筈だつた。

「ま、さか」

そう言葉を発したのは刹那。

目を見開き、虚ろに宙を見る。その顔色は蒼白だ。

彼女にとつて、その想像は最低最悪。否定したい。否定して欲しい。

定まらない視線で、漸く焦点を合わせた瞳に映る老人。その口から否定を欲していた。

学園長も、その様子から察したのだろう。短く息を吐き出し、告げる。

「……刹那君の、思つておる通りじや。

貴奴等は儂の孫を拐つもつらじい。

……しかも、それを

一瞬、刹那は全てを無くした。

視界は無へ。周りの音も聽こえず、心臓は鼓動を忘れた。

思考なんて何一つ無く 理性を以て動くヒトで在ることすら放棄した。

刹那、その名の通り、瞬きの時程に僅な間だが 全てを無くした。

視界に色が戻り、自身の荒い息と早鐘の鼓動を聴き、知らず知らずに抑える胸は、締め付けられたような痛みを訴え続けた。

思考を占めるのは、何よりも大切な幼なじみの笑顔。それを頼りに、漸く 担任の教諭が肩に手を置き、こちらを心配気に見詰めるのを知覚するまでには 幾らかの平常心を取り戻した。

人が去つた学園長室で、老人は深く腰掛けた椅子にて目を瞑る。ここに来ていた三名が退出してから、半時は経っていた。
その半時。彼はただただ思考の海に居た。

婿殿との会話。刹那達との会話。

立場故に、明確な決断をした。

詠春からの情報で、一番重要なのは孫娘のこと。

爺として、可愛い孫娘を危険な目に遭わせたくは無い。だが、その為に他の何も知らぬ一般人を巻き込むのは筋違いだ。
ましてや立場故に、『高々孫娘一人の為に』全てを棒に振るような真似は出来ない。

修学旅行を中止にする?

否

孫娘を差出、都に惨事を齎す?

断じて否

比重は孫に傾いている筈なのに、状況はそれを覆す。

目前に迫つた修学旅行を中止にする大義も無く、時間すら無い。

そして、よりによつて”助力まで付いてしまつた”。

孫を護れる手段が増えた為に、孫娘だけを此方に置く理由すら失つた。

敵の規模は明らかに少ないだろうし、親書を以て和睦を成す為に英雄の息子すら動かした。

好転している筈なのに、そのせいでの間にか進む道は前にしか無くなってしまった。

脇道も、帰り道も無い。一番安全な道は疾うに自分達で埋めてしまつたのだ。利害の無い、極めて平坦な道は。

在るのは、見た目が危険な吊り橋か。渡りきれば、そこには絶景が待つているような。

東西の和睦と、英雄の息子へ旅の指針を。修学旅行はまだあざけない少女達に、大切な想い出を。

そうして得られる利潤と、算定する敵の規模。そこだけ見れば、難易度の低さから逸る理由はない。ただし、失敗した時の害悪だけが一等目につく。

「それさえ無ければのう。

儂も悩まんで済むのじゃが」

だからこそ、詠春を通して語られる弓の話に悩む。

向こうが孫を贊とするなら、それよりも早く此方が贊としろ。そういう言つことだ。

木乃香の生い立ち故に、普段なら逆に手は出せない。その禁すら破る以上、最早二の次は無く、敵は失敗すら見ていない。在るのは配当金を掴む自身の姿だけだろう。

そんな膾を取り除く手段に木乃香を使う。

効率的なそれは、かと言つて納得出来るものではない。
事実、詠春は拒絕した。自身も問われれば拒绝する。

「そして残された道は、たつた一つとはの

結局、どんなに悩んでも、親書を守つて木乃香も護る、たつたそれだけ。

敵が不退転なら此方も不退転でそれに挑むしか無い。

ただ、祖父としては、微かでも危険がある所に行かせたくなかつた。組織の長として決断しながら、個人としては未だにそんな決断を悩み、悔やんではいる。

翁は月を眺める。真円に為れず、どこか欠けた月を。

月は翁を照らす。意を決した筈の、どこか欠けた翁を。

互いに、最後の一欠片が足りない、似た者同士。

だが、その実 決定的に違うモノがある。

時と共に真円を取り戻す月と、何かを溢しながら足搔くヒト。

そうしてヒトは、溢した何かに意味を求める。

「ヒト、と云うのは、徒に意味を求めがちじやの」

僅かに、自嘲の笑みを作りながら、ただ月を眺めていた

ヒトは 求める（後書き）

本当は爺側じゃなくて、親父側の方で話進める予定でした。
お陰でなんだか良く分からぬ話になってしまった。

電話での会話が不明なのは仕様です。

全て答えを暗示するようなのは、読者的に飽きたかなー……なんて
勝手に思つたが最後、こんな推理小説ばりに謎しか残してません。
ま、たまにはこんな書き方もアリでしょう。

何でも解説君とかウザイし。でもそれ以上にクドイ文章だし。小太
郎出ねえし。ダメだな、この回。

そしてやつたぜ刹那。君は頑張った。親父と爺の間に潤い（おんな
のこ）成分運んだよ！全然萌え要素無かつたけどな！

あー、そして最後の方で失敗したかなー。
書いてるうちに、本来書きたかったことから微妙にズレて、修正し
てるうちにあんなんなった。

余談ですが、月下老人と言つ言葉が有ります。最後のシーン書い
てる時に思い出した。全然シーンに合わない意味ですがw

小太郎は夢を見ている。

今より幾分幼い頃、何度か土郎を説得し、漸く鍛練に付き合つて貰つた。

強さに拘りを持つ故に、身近に強い相手が居れば当然その強さに追い付きたく思うモノ。

そうして半年も鍛練を続けたある日、小太郎は一つの疑問を口にした。

「どないしても勝てん相手に勝つにはどないしたらええんや？」
まだ幼い故に、何処か文法が間違った言葉だが、その意はちゃんと通じたらしい。

「それには先ず自身に負けない事だ」

……訂正。通じていなかつたらしい。

小太郎は相手に勝つ方法が知りたかったのだ。そんな相手の無い自分なんて見えないモノに勝つことなど出来ない。

「それは間違いだ。目に見えないからと言つてている時点で己に負けている。

そして、自分自身に勝つことなど出来ない

全く以て意味不明だつた。

幼い自分にそんな哲学じみた事を言つて、理解が出来ると思つていたのだろうか？

それに『負けない』は『勝つ』とは違うのか？

「大いに違う。

いいか小太郎。イメージするのは、常に最強の自分だ。

そこに妥協は無く、僅な狂いも赦されない。

最強で在るが故に勝てず、己で在るが故に負ける事は赦されない

今は分からなくとも、必ず覚えておけ そう云われ、必至に記憶した。だから今でもこつして夢を見る。

分からぬなりに、それは大切なことだと思つた。何れそれが解つたなら、それはきっと自分は土郎と同じ所に至つた時だろう。

今は分からぬ、だから質問を変えてみた。

「なら、兄ちゃんが勝てん相手つて居るん?」

「それは無意味な質問だ。何故なら

「ああ、やっぱり無意味か。それほど強ければ負け知らずなのだろう……そう、思つていた。だからそれはあまりに予想外。呆けた自分が、その時どんな事をして、何を考えていたのか全く記憶に無い。もしかしたら何もしていなかつたかも知れないし、何も考えてなかつたかも知れない。

何せ、彼はこう言つたのだから。

私は誰にでも負ける可能性が在るからだ

その時の小太郎は間違ひなく混乱の極みにあつた。自身にとつて、強さの権現とも言えたヒトの言葉とは思えないからだ。

只でさえ意味不明な問答の後、一度も勝てない相手に『誰にでも負ける』などと言われて納得出来る訳も無し。

イマイチ思い出せないが、本気で喰つて掛かつた気がする。

「そうだな、単純なスペックで言つたら私は小太郎にも勝てない。強化しても獣化されたら筋力で勝てない、単純なスピードで勝てない、氣も使えず才能も無い」

淡淡とした言葉に、小太郎も頭が冷えて行く。確かに……と、その言葉を肯定する自分が居た。

それと同時に疑問が湧く。それでも自分は勝てた事がない、と。

「それはそうだ。私はお前にソレをさせないのだから。

いいか小太郎。いくら力があつても当たらなければ意味はない。スピードがあつても来る方向が判れば対処は楽だ。氣が使えないからと云つて、態々同じモノを求める必要性も無い。

“勝てない”なら“負けない”何かを創り出せ。決して相手より

劣つた部分で戦うな

言われて不満顔をしていた小太郎。何と無く、それは卑怯な気がして納得出来ないでいた。

だが、その一方で何と無く理解はしていた。確かに、士郎はそんな戦い方だったから。自分のやりたい事を、勝てる手札を出させない。或いは当てさせない。

最初から結果が分かつていた阿弥陀籤。最初に選べる選択肢が多いのに、辿つて行く過程は流れに沿つたまま。行き着く先は自分には見えていないのに、それを作つた相手は最初から結果が判つている。

新しい技と言う線を書き込んで、それを最初に書き込んでしまつたら結果は判つてゐる。

だから勝てるとしたら、流れの途中で線を書き込む反則しか無い。則ち“閃き”。

「そうだ。才能とは、有り体に云つて閃きだ。

苦しい状況で、新しい“何か”を生み出せる者を天才と言つ。……その点で言えば、小太郎……お前は間違ひなく天才だよ」予想外の方向から褒められた為に、またしても呆ける小太郎。それでも、閃きで勝てないなら　やはり納得出来るモノではない。そこで思つ。閃きと言つ反則で勝てないなら、士郎も天才ではないか、と。

「それこそまさか、だ。

私は才能と言うモノを片つ端から欠如している。そもそも、私は戦いに関しては何ら勝るモノを以てていないのだ。

閃きなど無いし、出来るのは既に裡に在るイメージを形作ること。端的に云つて、私は剣だ。

相手を傷付けることは出来るが、それだけ。その剣を持って技を生み出すことは出来ない。扱い手ではない故に、既に剣として象在る私はそれを使いこなせない。

仮に私が剣を持ったとして、所詮二流。何処まで行つても一流に

至れない。誰にも出来ない特別は無いが、誰にでも出来る普通は極める事は出来る。「一流なら一流らしく、その一流を極める。

そうして出来た「一流の極み」。それが一つではなく、自身が持てるもの全てなら?」

『そら勝てんわ』

先程と違い、何処か呆れ顔で納得。結局、何一つ派手さも無い淡淡とした行程で倒された自分。その実、ただ自分が不利なまま何も出来ずにいただけ。結果を変えようと必死に閃いた技も、余程予想外のモノでなければ既にある「一流の極み」に止められる。

斬るなら斬る。突くなら突く。それらを繰り返し窮めた。

歌いながら踊れないなら、せめて歌うことを極めようとした歌い手に、出来るからと云つて歌いながら踊つても、派手なだけで勝てる事はない。何れ歌いながら踊れるモノは、歌うことしか出来ないモノを超えることは田に見えても 少なくとも今は勝てはしない。

つまり、小太郎が勝つには相手が出来ないことで勝るしかない。それを卑怯だと思うなら、その才を以て凌駕するしかなく 結局の所、才能を開花させただけでなく、その才能を伸ばさねば為らないなら どのみち“今は”勝てない。

「そうだ。所詮私は“負けない”だけだ。

元より、私は戦う者ではない。現に、身体的なスペックで負けている。

それに、私の用いる切札ですら、“既に存在していたモノ”的イメージを形象化するだけ。それを強化しても、その存在に定着した意義は変化しない。変化を促しても、只見た目が変わるだけ。力を注いでも、容れ物の許容が知れている。

気や魔力を捏ね回し、違った新しい何かを生み出す事など出来はしない。一点に収束し、力を高める事すら出来ない。

違う何かを混ぜることも、掛け合させてより大きくすることも出来ない」

黙くして話を聞き、小太郎は必死に考える。

これはとても大切なこと。今は理解出来ないかも知れないが、決して忘れるなど本能が告げる。

所詮それは士郎のことかも知れないが、それを識ることが間違いなく自分の力になる そんな予感。

自分は才能がある らしい。

士郎の出来ない狗神を使え、氣も使える。獣化もまだまだ伸び代があるし、分身だつて使える。

『なんや、まだやること仰山さんあるやんか』

確かに今は勝てないが、何時か絶対に勝てる時が来る。そう思えた。

なら、これからも閃きを繰り返し、閃きを極めるだけ。もし、一流になれるモノを見付けたら、一流の辺り着けない極みに至る。

それが目標。それが最強の自分。

「その目標、それに至る過程こそが己の敵だ。

極みを知らず、最強をイメージ出来なくなる時は必ず来る。

その時、己に負けてはいけない。勝てなくとも、負けなければ自由結果は見えてくる」 まだ半分も理解出来ないが、何と無くそう、何と無く、心に染みるとでも云つのか 漠然と謂わんとすることが分かつた。

きっと、もつと簡単な言葉があつただろう。それでも、長く詞を重ねて、連ねて、裡にある想いを説き続けたこと自体に意味がある。なら、自分に出来ることは忘れないこと。少しづつ詞を解き続ける為に、その詞は忘れてはいけない。

「なんや、長い話し聞いたら眠なってきたわ」

「そうか。なら、ゆっくり眠るが良い。焦る」とは無い。まだまだ先は長いのだからな

そう言って微笑む“兄”の姿を見ながら、酷く疲れた身体は心地好い安らぎに充たされていた。

「小太郎はん。こないなとこりで寝とつたら風邪引くえ」
そんな若い女性の声が間近に聞こえ、懐かしい記憶が映した夢から褪める。

薄らと開けた視界に眩い陽光が入り、思わず開いた瞼を綴じてしまつ。陽光を遮る様に左の腕を翳しながら、再び瞼を開くとそこには最近見知った顔があつた。

眼鏡を掛けた少女。服装のセンスは小太郎に理解出来ない、やたらフリフリの多いモノ。そのくせ、神鳴流とか言う武闘の流派の門弟で、実力もかなりのもの。

見た目と中身が色々違う。そんな仕事仲間だ。

「おー、月詠やんか。なんや、俺寝てもーたんか」
月詠は何が楽しいのかニコニコしている。

いや、何時もニコニコとしているが、表情だけでなく口…
… 気持的に悦んでいるよつな。

「ええわ〜。小太郎はん、寝顔がえろうつ可愛えおすな〜」
可愛い、と言われて男として納得いかない。男ならカツコイイ。これだ。

ムスッとした顔をしながら、完全に覚めた思考である疑問に行き着く。

「……なんでこんなとこ居んねん」

そう、自分は鍛練出来る場所をと雇主の千草と言つ女性に聞き、京に数在る神仏の社から、小さな山頂の寂れた神社に居た。
とてもではないが、好き好んでこんな場所に来る輩は居ない。
千草から人払いの符を貰つて貼り付けた為に尚更だ。

「小太郎はんと試合うか思て」

その小太郎の疑問に、然も当然とばかりに即答。

相変わらずニコニコしている月詠に、先に折れたのは小太郎。どうせ一人の鍛練では限界があるし、手合わせを拒否する理由もない。わかつた。おおきに。と短いやりとりで起き掛けの予定は決まつ

た。

場所も移す必用も無いので、そのまま境内の中心まで歩いて構え。月詠も小太刀を両手に構える。得物は刃だが、小太郎は氣にも止めない。それに、二刀流は小太郎の臨む所でもある。

何時も攻略出来ない二刀使いに対する予行練習。そんな気軽な気持が無いでもない。

そんなやる気満々の小太郎に、笑顔の質を変えながら、より一層笑みを濃くする月詠。本来女子供に手を上げない小太郎ではあるが、月詠の実力から本氣で掛かっても良い氣はしている。それに、別に殴つて負けを認めさせる必用も無い。自分が“負けなければ良い”のだから。

「ほな、始めますえ」

「何時でも来い」

その後、段々波に乗つて行く一人に横槍が入る。表情の読めないと言つより無表情な仕事仲間の少年。その少年から雇主から呼び出しがある、と告げられて。

不完全燃焼故、渋々ではあるが雇主の元へ戻る。

そう、漸く、“仕事”が始まるのだ

弓、狗3（後書き）

漸く小太郎主人公タイム。

……月詠との戦闘？ 書く？ 書き直す？

つてかおんなのこまた出た。

自分でも予定外。予想外では無かつたけど。

で、月詠の戦いはまだまだこれからです。月詠先生の次回作に「一期

t (r y

……つてか、ホント需要あんただろが、この作品

『、狗4（前書き）

期待してないと思つけど、みんなお待たせ。
場面超跳ぶけど気にしないで。

先に言つてオキマス。超短いです。

それはいつのことか……

小太郎にとつての日常。軽い言い合いからちょっと手が出て、そのままちよつとした兄弟喧嘩。

そんな時ばかりは何時にも増して憎つたらしい笑みを見せる兄。そして結局勝てなくて、それでいて何故か楽しい想い出に変わるそんな日常、その幾つかの内の一つ。

他愛もない殴り合いで、互いの身体強化の違いに気付いた時だ。小太郎が氣で、士郎が魔力……なんて単純なモノじやない。互いに裡からの強化だが、一点、違うモノを見付けた。

言うなれば強化の過程なんて判り辛いモノではなく、最終的にどんな力タチになつたか、である。

氣も魔力も、結果的に見れば「身体に纏う」事で見えない鎧を着込むようなものだ。

だが、士郎は「身体そのもの」を強化する。簡単に言えば「存在そのものの強化」だろうか。

紙が堅さだけ石のようになつたり、砂糖の甘さがより際立つたり。つまりそう言うことだ。

例えば、小太郎が速く走ろうとするなら、ジェット機のように推進力を氣に喩え、その推力で加速する。これは西洋の魔法使い達も変わらない、専ら『舞動術』などと呼ばれる技に繋がる。

これに対し、士郎は『肉体そのものを強化』することで、その脚力を以て加速する。

これに気付いた時に、少し真似しようと思はしたが、そもそものやり方が分からず断念。だが、そこで新たな発見もあつた。

確かに、存在の強化をすれば、断続的に細かい肉体の稼働をするには向いている。踏ん張りも効くし、衝撃緩和や筋力強化による過重量への耐性も出る。

だが、瞬発的な加速や一点に集中しての最大値の増加は得られない。分かりやすく言うなら、川辺を超えるのに水中を泳ぐのか、はたまた水面に浮かぶのかそもそもそれを跳んで超えるのか。何が水中で何が他かは言つまでもないだろう。

自分は水面に浮かぶか跳べるが、土郎は水中を泳ぐ為の強化しか出来ないのである。

しかし、それも欠点ばかりでもない。存在強化とも言つべきソレは、何も自身ばかりが対象ではない。他者の強化は出来ないらしいが（少なくとも土郎にとっては）無機物などの強化は実際にしていた。

まあ、本来無手の小太郎には要らぬ技能だが、それは小太郎に出来ないが故に羨ましく思つ。

それを言つたらこう返された。

「出来ぬことを羨むくらいなら、出来ることで凌駕してみる」

それは至極当たり前のことだが、然れど難しい。

気付かぬうちなら単に優劣を着けるに難くない。だが、気付けはその在り方の違いに何を以て優劣を着けるのか、……と少しは考えたが、額面通りに『凌駕』すれば良い。最終的に勝てれば良いのだ。

と言つたら怒るだろうか？

と考えていた。

「ふむ。何を考えていたか察しがつくな。どうせ小言でも言われる警戒しているようだが——」

それで当たりだ

その時の自分は余程呆けていたのか、嫌味を忘れ、声まで殺して笑う姿に思わず手が出たものだ。

「俺こそ『そのクチ』だよ。

何にでも劣る自分が、それでも勝てる何かを造らなきゃダメだった。

速さに追い付けないなら、置いていかれない状況を作る。能力で勝てないなら、能力に代わる何かを持つてくる。普及しているモノ

オリジナル
で劣るなら、誰も知らない自分で勝てば良い」

常に厳つい表情が解け、子供じみた顔で言つた言葉を覚えてる。
覚えてる

「……目は覚めたか？ 小太郎」

起き抜けの一聲に、意識がはつきりして來た。

同じ年頃の、見下してもいた西洋魔法使い。その少年に破れ、氣を失つて そのまま夢に落ちたらしい。

ボヤけた視界の端に、特徴的な白髪を見付けた。何故ここに居るか分からぬが、仰向けに大の字で転がる自分に軟らかな布地が掛けられているのを知覚する。自身の体温と異な暖かさを感じるに、そう時間も経つていのうだろつ。何が、かは推して知るべし。

「……負けた」

自分でも分からぬが、口からは言葉が溢れてしまつていた。しかも、止められない。

「おんなじくらゐの西洋モンでな？ 弱かつたんよ

「……そうか」

少しの間を置いて、淡々と返事が返つて來た。

だから、と言つわけではないが、もう言葉が洩れるのを止めようとは思わない。

「魔力ばつかあつても、戦い方も知らんガキでな？ 強化も出来んし、仲間の姉ちゃんのが強いくらいやつたわ」

静かに聞く士郎から、何も言わないのに言葉が聞こえた気がした。

「それで」と続きを促しているような、そんな感じだ。

何も言わない、だが、確實に話は聞いていると確信を以て応える。語るに連れ、気が楽になつてきて、知らず知らず、口元は綻んでいた。

「でもな、アイツ、土壇場で強化したんよ。

強化言つても無理繰りやつたような出鱈目なヤツや。強化なんて

珍しくもない。

でも……でもな?」

不思議と可笑しなって笑う。気が抜けて、堪えたモノも瞼の裡から零れさせて。

「アイツにとつてはオリジナルだつたんや。何も知らんで、それでも俺に勝てる『何が』を見付けて

「アイツ、俺を殴つた」

初めての経験だった。負ける要素が無いと思つてた相手に負けて、無性に悔しいのに 何故か嬉しくもある。

上ばかり見上げて、強くなる為により強い者と戦うのが一番だと思つていた。

そうしたら出会つてしまつた。直ぐ側に自分を超えて行こうとする、自分と同じ上を見上げる者と。

手を抜いたら直ぐに追い越されてしまう。そんな恐怖感とそれ故に生まれる競争心。

今までは「何れ勝つ」と云う目標が先にあつただけ。だが、これからは「負けたくない」相手が出来た。

それを想うと心が奮えて堪らない。

笑みは濃くなり、零れる零も増えて行く。

「天才……つて、ああいうヤツのことなんやろな」

「……それで、お前は諦めるのか?」

天才に負けて、それで終わりか?」

滲む視界では、その表情は判らない。だが、声で判る。それは「何時も通り」の皮肉気な笑みに違いない。

「ぬかせ! 次勝ちやイーブン、次も勝てば勝ち越しや!」

次は負けん。ネギに出来て俺に出来んワケないやろ

「ふむ。なら、お前に出来ることはその子にも出来るのではないか?」

もしくはお前に出来ないことを出来るかも知れん」

”何時も”この男はこうだ。こんな聞けば頭に来るような物言い

で、それでもその言葉の裏に違う想いを乗せて。

「上等……ッ！ それこそ遭り甲斐があるつちゅーモンや！」

仰向けに寝ながら右の拳を天に突き出す。

狼煙代わりの拳の先に、何かを見付けたのか それとも何かを映しているのか。じつと天を見詰める小太郎を満足げに見詰め、静かに土郎は去つて行く。

シンボルでもある、その紅の外套を小太郎に預け、一度も振り返らず いつの間にか夕闇に紛れ消えていた。

『、 犬 4（後書き）

本当はモット長く予定だったのに、ブランク故か文章が思い浮かばぬ。

場面的に丁度切り替わるから、続きをまたの機会。

内容的にはよくあるスポコンのノリ。

やっぱ小太郎は主人公適正ネギよりあるよ！

ヒロインは……

……ぐきみーでおながいしま

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2840o/>

弓の軌跡、孤独な狗

2011年2月23日00時31分発行